

比較分析の方法と課題*

——海外における歴史社会学の研究動向に関する一考察——

太田有子

概 要

歴史社会学は、社会学における一般理論への偏重に対する自省から、分析対象地域の歴史経験や固有の事情をふまえつつ理論構築を志向する試みとして発達したが、同分野の定義をはじめ、さらには分析方法から理論の射程範囲に至るまで、現在もなお議論が続いている。なかでも比較分析は、歴史社会学分野において主要な分析方法として用いられ、また近年は広く社会科学分野においても、その意義が注目されているが、そのあり方をめぐっては諸論が展開している。本稿では、「歴史社会学」の軌跡を辿りつつ、比較分析の方法論ならびに研究例を通じ、その内容を検証すると同時に今後の課題を考察する。

キーワード

歴史社会学, 比較分析, 理論, 地域比較, 社会変動

1. はじめに——問題の所在——

歴史社会学の歩みは社会学の発展とともにあったといっても過言ではない。社会思想家の K. マルクス (Karl Marx) や社会学の礎を築いた M. ウェーバー (Max Weber) といった代表的な古典研究を例にとっても、それぞれの理論の方向性は異なっているものの、政治社会状況の変遷を長期的な視野で捉え、その説明を試みるという意味では、現在の歴史社会学分野においてもその伝統は継承されている。しかしながら歴史社会学という分野は、社会学の一分野としての制度化よりも実質的な研究が先行し、「歴史社会学」自体の定義や方法論に関しては、同分野の代表的な研究者の間においても合意はなされていない状況にある。

* 本稿の執筆および掲載に際し、石田浩先生、佐藤香先生をはじめ2名の査読者、編集委員の諸先生方より貴重なご助言を頂いたことを記すとともに、あらためて感謝の意を申し述べる。

こうした状況をふまえ、本稿では、海外における歴史社会学の軌跡を辿りつつ、同分野をめぐる議論を概観し、比較分析の方法に関する近年の議論や研究を精査する。後述するように歴史社会学という分野の定義をめぐるのは、諸論が展開しているが、本稿では暫定的に、歴史社会学研究者として自認している研究者とともに、必ずしも自らは同分野の研究者として自認していなくとも、同分野に貢献したとされる研究者による研究の総称とする。このように定義した上で、歴史社会学分野の発展の経緯を辿り、同分野がどのような問題提起とともに発展してきたかを通観し、同分野の定義や制度化をめぐる議論を概説したのち、比較分析の方法論ならびに近年の研究を精査する。

特に比較分析に焦点をあてる理由を述べると、比較分析は、かねてより歴史社会学分野における主要な分析方法として用いられており、その方法を論じること自体、「歴史社会学」の問題設定や理論的立場を改めて問い直す作業であるといえる。加えて近年、比較分析は歴史社会学分野のみならず、広く社会科学諸分野において注目されている分析方法であり、その意味において、比較分析の方法を議論することは、現在の社会学ひいては社会科学における歴史社会学分野の位相や、今後の方向性を考える上でも極めて重要であるといえる。こうした問題意識から、比較分析の方法を精査することで、歴史社会学のあり方を検証すると同時に今後の課題を考察する。

II. 「歴史社会学」をめぐる諸論

「歴史社会学」をどのように定義するかは、かねてより多くの研究者の議論の対象となっている。歴史社会学分野の代表的な著作の多くが、社会学の古典的伝統を継承しつつ発達したという意味では、その展開は社会学という学問の発展とともにあったといえるが、厳密には社会学の一分野としての制度化への動きは、1960年代後半以降、当時の社会学の一般理論への偏重に対する自省から生まれたとされる。特に、単線的な近代化モデルへの懐疑や、一般理論の重視により分析対象の歴史性、地域性を捨象してきたという批判とともに、資本主義の進展や国家の興亡、革命や民主化など政治社会変動の過程は地域固有の事情に照らして分析する必要があるという指摘がなされ、こうした地域性をふまえた理論構築を志向する研究が生まれていった。このように従来 of 社会学研究に対する批判的姿勢が、歴史社会学分野の確立への原動力となり、またこうした問題意識から分析を行っている研究を同分野の代表的研究と位置づけることによって、同分野が確立されるに至った。

その後、歴史社会学は社会学の一分野として定着していったが、同分野の定義ならびに内容に関しては様々な議論が存在する。そもそも「歴史的 (historical)」という語句自体、

時間的過去という語義とともに個別的という語義があり、こうした多義性も含め、「歴史性」をどのように受け止めるかという問題は、歴史社会学の存立の根幹にも関わる問題として諸論が展開している。

かねてより歴史社会学を社会学の一分野として確立させることに積極的な立場をとる研究者の多くは、従来の社会学研究が一般理論に傾倒し、分析対象地域固有の事情を捨象する傾向にあったことに対する自省や批判とともに、同分野の制度化を主張している。例えば、T. スコッチポル (Theda Skocpol) は、従来の社会学とは一線を画するという立場を明確にし、方法論の多様性を認めつつも、自らはその定型化を志向することで歴史社会学分野の確立と制度化をはかっている¹⁾。一方、同分野の代表格とされる研究者のなかにも「歴史社会学」の制度化自体を問題視する指摘もある。例えばC. ティリー (Charles Tilly) は、社会科学は究極的には研究対象を理解すると同時に因果関係を説明することを目的とするという理由から、自らは「歴史学」、「社会学」の分化や社会学の一分野 (subfield) としての「歴史社会学」の制度化に疑義を表明している²⁾。

また隣接分野である歴史学の動向にふれると、1960年代以降「社会史」の興隆があり、また他方では数量分析の採用や一般理論構築の志向を模索する動きもあるなか、歴史学、社会学両分野の境界線が曖昧になっているとする指摘がある³⁾。一方、こうした見解に対して、歴史学分野の分析対象の広範化や分析方法の変化を認めつつも、両分野の方向性、理論構築に対する見解の相違は厳然として存在するという主張もある⁴⁾。またこうした指摘とは別に、近年多くの研究が両分野で共有され、学際的な研究が進展していることも考慮に入れる必要があるといえる⁵⁾。

このように歴史社会学が社会学の一分野として確立されていく一方で、同分野における代表的な研究者間においても「歴史社会学」に対する見解の相違が見られ、「歴史社会学」という分野の定義や内容に関して合意はなされていない状況にある。むしろ実質的な研究が先行し、そうした研究を包含する分野として同分野が成立し、その制度化をめぐる議論が展開してきたといえる。

従って同分野においては、「社会学」としての理論構築のあり方や分析方法をめぐって多様な見解が示されている。分析方法をめぐる議論に関して述べると、例えば、時間的過去をどのように捉えるかという議論において、ある特定の出来事に注目し、過去の特定の

1) Skocpol 1984.

2) Tilly 1981.

3) Abrams 1980. P. アブラム (Phillip Abrams) は、上述の指摘とともに「歴史社会学」の確立により両分野の融合をはかる議論を展開している。

4) Goldthorpe 1991.

5) 社会学、歴史学両分野の関係をめぐる総括的な議論として、以下の文献を参照。McDonald 1996.

一時点を分析するという立場もあれば、より長期的な視点で分析対象の経時的变化を捉えるという立場もある。また時間の経過そのものによる作用を視角に入れることで、より連続的な変化を捉えていく必要を促す議論もある⁶⁾。従って「歴史的」な分析といっても、歴史性や時間の捉え方もふくめて、分析対象に対する認識のあり方は異なっており、理論構築に対する姿勢においても多様な見解が見られる。

歴史社会学研究の多くは、歴史性、地域性をふまえた上で社会学としての理論構築を志向しているが、なかにはこうした「歴史的転回」や「歴史社会学」の発展を認めつつも、その「歴史性」に対する認識が不十分であることを指摘する主張もある。こうした議論を展開する論者によれば、因果関係の分析も研究者の立場を投射した「説話」(narrative)であり、研究の分析枠組みに内在する研究者の立場を明示する必要性が指摘されている⁷⁾。一方で、こうした議論に対する懸念を表明し、より「普遍的」なグランドセオリーの復活を求める議論もある⁸⁾。このように従来の社会学において軽視される傾向にあった個別性の回復という点において、その「歴史的」視点の意義は共有されつつも、理論構築に対する立場や、さらには実証主義に対する見解の相違も含めて合意がなされていない状況にある。つまり、個別事例の理解を通じ、どのように一般理論化をはかっていくかという点において、「歴史社会学者」を自認する研究者の間でも議論が続いており、さらには必ずしも自らを歴史社会学者と自認していない研究者や、「歴史社会学」の制度化やあり方に疑義を表明している研究者による議論も併せると、その内容は社会学内の一分野における議論として捉えるには困難な状況にある。

上述のように歴史社会学自体の定義から研究のあり方に至るまで、多様な見解が存在す

6) Abbott 1990; Aminzade 1992; Sewell 1996. 上述の議論は経時的变化を分析することを促したという意味で意義があるが、他方で分析対象を「歴史的出来事 (historical event)」の連続と捉える視点自体に関しては議論の余地がある。また上述の問題を経済学、政治学分野で議論されている「経路依存性 (Path-dependence)」という概念から歴史社会学分野の議論に即して論じた論文として、以下の文献が挙げられる。Mahoney 2000.

7) ナラティブ (Narrative) という用語の語義に関しては、狭義としては、研究者の立場、視点をどのように扱うべきかという議論に集約することもできるが、厳密には学問分野によって用法が異なり、極めて多義的である。政治科学分野では R. ベイツ (Robert Bates) らが合理的選択論的立場から比較、事例研究の意義を強調し、「分析的説話 (Analytic Narrative)」という分析方法としての定型化を試みている。一方で歴史学分野では、分析対象の人々の「語り」や研究者の視点をどのように記述すべきかという議論を指し、インタビューや回顧録、手記などの資料分析に関わる一連の方法論が生じている。また歴史社会学分野の研究においても、分析対象の帰属意識形成とその分析方法をめぐる議論として用いられている。ここで指すナラティブとは、実証主義に対する姿勢、理論構築や因果律に関わる認識論的議論や方法をめぐる一連の議論として「説話」とした。歴史社会学分野における議論の例としては、上述の点を指摘した M. ソマーズ (Margaret Somers) の認識論的議論や、A. アボット (Andrew Abbott) が示した「叙述的実証主義 (Narrative Positivism)」などが挙げられる。Somers 1994, 1996; Abbott 1990, 1992.

8) Kiser and Hechter 1991, 1998. またこうした見解に対する反論としては、以下の論文が挙げられる。Somers 1998.

るなか、こうした議論が必ずしも狭義の歴史社会学、つまり歴史社会学者を自認し、その制度化に積極的な研究者による研究に収束し得ず、また政治学や歴史学など社会科学の隣接分野の研究や、さらには人文科学分野の研究との相互作用のなかで議論が発展していることから、歴史社会学分野における主要な問題として議論されてきた問題群を改めて学際的な視点で捉え直す必要があるといえる。その具体的試みとして、次項以下では比較分析に焦点をあてることで、同分析をめぐる議論がどのようなかたちで歴史社会学分野自体の発展とかがわっていたかを検証する。

比較分析は、かねてより歴史社会学分野の代表的研究者の間で用いられており、近年においては、歴史社会学分野のみならず、多くの社会科学の研究者の議論の対象となっている。特に、社会科学全般において従来理論が特定地域の歴史経験を前提としており、他地域の分析には議論を要すると同時にその限界を指摘する議論が生じており、こうした指摘のなか、改めて比較分析の意義が注目され、その分析方法のあり方に関する議論が再燃している。従って同分析に焦点をあてることで、歴史社会学の一断面を示すと同時に、上述した同分野の定義に関わる議論や、社会科学におけるその意義に関しても何らかの示唆が得られると考えられる。このような問題意識から、以下では比較分析をめぐる議論を概観したのち、近年の研究において比較分析がどのように用いられているか精査し、同分析の方法をめぐる議論が、上述した歴史社会学分野の存立に関わる議論の根幹とどのように関わっているか論じつつ、今後の歴史社会学分野の方向性を探ることとする。

III. 比較分析をめぐる諸論

1. 歴史社会学における比較分析

歴史社会学分野において比較分析という手法は、方法論の一つとして、古くはマルクスやウェーバーに代表される社会学の古典的著作において用いられ、また歴史社会学が社会学の一分野として制度化されていくなか、多くの研究者によって研究方法として積極的に採用されることで定着してきた。例えば歴史社会学分野の代表的研究とされる R. ベンディックス (Reinhard Bendix) や B. ムーア (Barrington Moore) による著作や、近年同分野において最も頻繁に引用される C. ティリー (Charles Tilly) や T. スコッチポル (T. Skocpol) の研究もまた比較分析を用いている⁹⁾。しかしながらこうした歴史社会学分野の

9) Bendix 1978 ; Moore 1966 ; Tilly 1990 ; Skocpol 1979.

代表的な研究者のなかでも、その分析方法に関しては見解の相違が見られ、事例選択のあり方から比較の目的、理論の射程範囲に至るまで、諸点において議論が続いている。

分析対象地域固有の事情をふまえ、比較を通じ政治社会変動の多様性を示しつつ、理論構築を目指すことを主張している代表的な研究者が、C. ティリー (Charles Tilly) である。ティリーは、社会学分野において静態的に社会を捉えようとする傾向を批判し、また従来の近代化論や全体主義的なシステム論は、個別の地域事情を捨象するゆえ、政治社会変動の過程に多様なパターンがあることを説明し得ないと指摘している。例えば、国家の興亡や民主化という現象一つをとっても、その過程は多様であり、こうした多様性を理解する分析枠組みを提示することが必要であるとしている¹⁰⁾。こうした指摘とともに、ティリーは自らの研究アプローチを「歴史過程分析 (Historical Process Analysis)」と命名し、固有の状況や偶発性 (contingency) に留意しながら、因果関係も含めて個々の事象を理解し、事例の比較を通じて政治社会変動過程の多様性を示すと同時に、事例間で共有される因果メカニズム (causal mechanism) を明らかにすることで理論構築を行うことを主張している¹¹⁾。

ティリーが示したような地域固有の事情を理解する意義を認めつつも、理論構築に関しては異なる立場から比較分析を行っているのが T. スコッチポル (Theda Skocpol) である。スコッチポルは、その革命の比較研究にも代表されるように、比較を通じて社会変動が起こりうる構造的要因を特定化し、その法則性の確立を試みている¹²⁾。

両者の分析方法を比較すると、スコッチポルは革命や政策の形成、施行過程という特定の時点ないしは短期的な期間内の変化に焦点をあてているのに対し、ティリーは国家形成や民主化の過程など長期にわたって分析を行っていることが特徴として挙げられる。また比較対象の事例に関しても、スコッチポルはその代表的著作において地政学的にも隔たりのある地域を比較分析の対象としているのに対して、ティリーは地域固有の事情を重視し、偶発性や付随的な現象を考慮に入れつつ、地理的に近接関係にある国家や一国家内の複数地域を比較分析の対象としている。従って理論構築に対する立場も、スコッチポルは事例間の類似性を特定化し、必要十分条件として扱うことで因果法則を確立することで、より「普遍的」な一般理論の構築を志向しているが、ティリーは一事例で生じた因果関係が、必ずしも他の事例で同様に生じるわけではないとしており、他事例への安易な応用や一般化に対しては警鐘を鳴らしている¹³⁾。それゆえスコッチポルのように変数を条件として扱

10) Tilly 1985.

11) Tilly 1995, 2001.

12) Skocpol 1979, 1984. 近年、スコッチポルはその政策研究において、政策のフィードバック効果などを挙げるなど、制度論的枠組みを取り込みつつ、時間の経過自体を因果的説明に取り込む必要性も主張している。Skocpol 1992, p. 57-60.

うのではなく、指標化することによって事例間の相違を示し、政治社会変動の多様性の説明を重視している¹⁴⁾。

このように歴史社会学の代表的な論者の間でも、理論構築に対する見解と分析方法の内容は大きく異なっていることがいえる。また両者の研究は、ともに歴史社会学の代表的研究とされているが、同時に隣接分野も含めて多くの研究者の議論の対象となっており、「歴史社会学」分野の議論が、実際には社会学の一分野という枠組みには収束しえず、その波及範囲は広範に及んでいることを示している。こうした状況に加え、社会科学全般において地域研究の発展とともに、地域固有の状況を理解する意義が認識されるなか、分析対象地域の地域性やその歴史的背景をふまえた理論構築を志向する傾向が強まっており、その場合の方法論として改めて比較分析が注目されている。

2. 社会科学における比較歴史分析の興隆

社会科学における方法論としての比較分析の意義を論じ、その定型化をはかっているのがC. レイガン (Charles Ragin) である。レイガンによると、比較分析とは主題テーマに即して事例を選択し、体系的に相違点を分析することであり、事例間の多様性を説明することがその主たる目的であるとしている。またレイガンは、社会科学における質的調査と数量分析の対立を批判し、比較分析を通じて両者の統合をはかることを主張している。具体的には、事例の個別性を重視する質的調査は、一般化という点では説明能力が不足しているとし、一方で数量分析は事例間において共有される因果律を説明するなど、一般理論の構築という面で有利であるが、質的調査に見られるような各事例の固有の事情や経時的変化などを捨象する傾向にあることを指摘している。その意味で比較分析は、各事例の固有性を理解しつつ、事例間で共有される事象の因果律のパターンの多様性を示すことを目的としており、質的調査と数量分析の特徴を併せ持つ分析方法であるとしている¹⁵⁾。

比較分析の方法と目的を明示したレイガンの議論は、社会科学における比較分析を定型化させる試みといえるが、一方でその方法と目的の統一化に対しては異なる見解も存在する。例えばJ. マホーニー (James Mahoney) らは、社会科学分野における主要な分析方法として「比較歴史分析 (Comparative Historical Analysis)」を経時的変化とその因果的説明を個別の状況を把握すると同時に体系的な比較を通じて行うことであると定義し、還元主

13) Tilly 1975, p. 81.

14) Tilly 1990.

15) Ragin 1990. こうした議論とともに、質的調査と数量分析の相互補完的關係を指摘している研究の代表例としては以下の文献を参照。King, Keohane, and Verba 1994.

義的な説明や叙述的推論を排除するとしつつも、分析の目的や方法の詳細に関してはその多様性を認め、上述のレイガンよりも柔軟な姿勢を示している¹⁶⁾。

実際、比較分析を行う研究のなかでも、レイガンが論じたように意識的に事例間の多様性の説明を試みる研究がある一方で、レイガンが論ずるところの「質的調査」として、個々の事例の理解や類似性を示すことを主たる目的としている研究もある。また比較分析の対象となる事例数に関しても、多数の事例比較によって、理論の説明能力の向上を主張する議論がある一方で、少数の事例に絞り、事例間における相違点を明らかにすることでより厳密な比較と因果関係の説明が可能になるという指摘もあり、事例選択のあり方は、理論の射程範囲を示すものとして長年議論の対象となっている¹⁷⁾。こうした議論に加えて分析単位としての事例の妥当性をめぐる議論も存在する。例えば、比較分析においては国家間比較 (Cross-national Comparison) が一般的ではあるが、国家を比較分析単位とすること自体、その同質性を前提としているという指摘もあり、分析時には比較分析の対象としての妥当性を議論する必要があるといえる¹⁸⁾。加えて分析レベルの多層化、多様化が進み、一国家内における地域間比較や、越境的な視点から研究対象をより広域に設定した分析を行うことで、国家を分析単位とする枠組みとは一線を画する試みも生まれている。

このように比較分析に関する議論は、分析の方法から理論の射程範囲に至るまで、議論が続いているが、上述したような議論が活発化していること自体、比較分析の意義が広く認知されていることを示している。実際、社会科学分野全般において、比較分析を通じ地域的多様性を確認する研究や、経時的変化を捉えようとする研究が漸増している。その意味で比較分析の議論は、歴史社会学という社会学の一分野における方法論という議論を超え、政治学、歴史学といった隣接分野も含めた社会科学における方法に関わる議論として、今後もその発展が予想される。以下では近年の研究例を通じ、実際に方法としての比較分析はどのように用いられ、またどのような課題を抱えているか、今後の分析のあり方なども併せて論ずることとする。

16) Mahoney and Rueschemeyer 2003, p. 6, pp. 11-15.

17) Mahoney and Rueschemeyer 2003, p. 16-18. 少数の事例から因果法則を例証することの問題を指摘し、変数中心の比較分析によって理論の説明能力を高めることを主張している議論の代表例としては S. リバーソン (Stanley Lieberson) の論稿が挙げられる。一方、スコッチポル、ティリーらは、比較自体の目的や論理構成に関しては異なる見解を示しているものの、少数事例に絞ることで各事例の固有性を重視した分析を行う意義を主張している。Lieberson 1991; Tilly 1985 p. 144.

18) 事例選択や分析単位に関する議論の代表例としては以下の文献を参照。Ragin and Becker 1992. 事例数とともに事例間および事例分析の方法をめぐる課題を併せて議論した論稿として、以下の論文が挙げられる。Mahoney 2003.

IV. 比較分析の研究動向

社会科学における研究の多くが、西欧地域における政治社会変動を研究対象としてきたが、近年、様々な立場から従来の議論を再構成する試みが生まれている。本節では、代表的な研究を通じてその方法の内容を検証するが、まず西欧地域を分析対象とした研究を、次に従来研究対象とされることが稀有であった地域を分析している研究を通じて、その方法の内容を精査する。従来の理論の多くが西欧を中心とする特定地域の歴史経験を前提にしてきたことに対する批判とともに、分析対象地域固有の経験をふまえた理論構築を行う必要があるという指摘がなされており、従来分析されることが極めて稀であった地域や、西欧との比較という文脈において分析対象とされてきた地域の地域固有の事情を改めて理解する試みが生まれている。またその際、比較分析を採用している研究も多いが、そのあり方に関しては議論が続いている。こうした状況を念頭におきつつ、近年の研究例から各研究者が比較分析をどのように捉え、また実際に分析を通じてどのような議論を展開しているかを中心に、比較分析をめぐる諸問題を論ずる。

1. 西欧地域における国家形成の比較分析

西欧地域における政治社会変動、より具体的には主権国家の制度化や政治体制の改編、民主化の過程やその要因は、歴史社会学の主要な研究対象として多くの研究者によって分析されてきた。なかでも従来の理論が単線的な近代化を想定してきたことや、西欧地域の経験を他地域に応用するといった研究を批判し、より地域性に照らした理論構築を論じた代表的な研究者がC. ティリーである。ティリーは、西欧地域において都市国家や領邦国家など多様な政治形態が共存しつつも、後には主権国家が制度化していく過程を説明するにあたり、地政学的要因を背景とする軍事化の進展を指摘するとともに、その方向性を強制力 (Coercion)、資本 (Capital) という二つの変数によって指標化することで、各国家の形成過程の多様なパターンを描き出している。このようにティリーの研究は地域性をふまえて比較分析を通じ、政治社会変動の多様な経路を示すと同時に、事例間に共有される因果メカニズムを抽出することを主眼としている¹⁹⁾。

上述のティリーによる西欧地域における国家形態ならびに形成過程の多様性の指摘を受

19) Tilly 1990.

け、比較分析を通じ、同地域の政治体制の多様性の背景や制度化の説明を試みる研究が生まれている。例えばT. アートマン (Thomas Ertman) は、欧州地域内の国家形態の多様性の起源を、地政学的要因とともに主権国家体制の制度化の時期や、代議制、地方レベルでの政治機構の発達程度といった点に見出しつつ、各国の政治体制の特徴の分類を行うことで、政治体制の多様性を説明することを試みている²⁰⁾。

上述のアートマンは、欧州地域内で優勢な国家が、その国際的地位の安定さらには秩序維持という目的から国際関係の制度化に積極的な役割を果たしたという説明を行っているが、こうした制度論的な説明をさらに進めて議論したのがH. スプリュト (Hendrik Spryut) である。スプリュトによると、欧州地域において様々な形態の政治体制が並立しつつも、後に主権国家体制に収斂していった理由を制度内における各国家の合理的選択の帰結としている²¹⁾。近年社会科学分野においてこうした合理的選択論ないしはゲーム理論的な枠組みのなかで、国家を合理的な行為体として捉える視点は拡大している。しかしながらこうした議論に対しては、国家内部における亀裂や様々な社会集団の関係に加え、偶発的な状況など、分析対象固有の事情をどのように捉えるのかという指摘や批判もある²²⁾。

またB. ダウニング (Brian Downing) は、経済的変化が、社会階層間の関係の変容を促すことで政治体制の変容を誘発するといった議論を批判し、国際的緊張を背景にした軍事化ならびに資源動員のあり方によって、政治的近代化の過程に多様なパターンがあると論じている。ダウニングの研究は、手法としては、比較を通じ、民主化の多様性を必要十分条件によって示すという方法を採用しているが、上述のように国際政治情勢を背景にしつつ、統治者が被統治層とどのような関係を取り結んでいくかによってその多様性を示すなど、ティリーの議論を継承している面もあり、こうした新たな要因を指摘することで、ムーアが示した因果的説明の批判的検証を行っているともいえる²³⁾。

上述した三者の研究は、主権国家の制度化や民主化の過程など説明対象はそれぞれ異なるものの、欧州地域内部の多様性を認め、同時に同地域内において共有されている歴史背景や国際関係をふまえつつ、比較を通じて従来の単線的な政治社会変動の理論の修正をはかる試みを行っている点が共有される特徴として挙げられる。また従来の歴史社会学分野では、ムーアやスコッチポルの研究に代表されるように、地政学的にも隔たりのある事例を選択する研究が数多く見られたが、より近似的な事例間の比較、つまりより多くの歴史経験を共有している近接地域や地政学的に密接な関係のある事例を選択し、共有される国

20) Ertman 1997.

21) Spryut 1994.

22) Mahoney and Rueschemeyer 2003, p. 21.

23) Downing 1992.

際環境的要因も考慮しつつ、比較を通じて政治社会変動の多様性とその要因を探るという手法が近年の比較分析の傾向として挙げられる。加えて比較の事例選択のあり方としては、国家間比較にならんで、一国内における地域間比較や中央ならびに地方行政機構レベルの比較という研究も見られる²⁴⁾。このように説明内容に応じて、比較分析単位は異なるものの、より近似的な事例を比較分析の対象とし、比較的少数の事例に絞るかたちで分析を行う傾向が近年の研究の特徴として挙げられる。

また理論構築のあり方に関しては、上述のオートマンやダウニングらは、因果関係を単一要因に帰することなく複数の要因を説明変数として挙げ、分析を複次化させるという意味では、ムーア以来の民主化の議論を批判しているといえるが、こうした要因を必要十分条件として扱うという点においては、ムーアやスコッチポルの手法を継承しているともいえる。しかしながら、上述のティリーの指摘にもあるように、比較を通じて見出された類似点を政治社会変動の「条件」として扱うことに関しては議論の余地がある。つまり理論構築を行う際に、比較を通じて見出された類似点や相違点を安易に説明変数として扱うことに関しては注意が必要であり、またこのような分析が、特に西欧地域との比較という文脈において「非西欧地域」に対してなされてきたことに対する異論が生じている。以下では、従来研究対象とされることが比較的少なかった地域や、西欧地域との比較において論じられることが中心であった地域を分析対象として扱っている研究例を通じて、各研究の理論構築に対する姿勢や比較分析の方法を議論する。

2. 「非西欧地域」の歴史経験と比較分析²⁵⁾

従来の単線的な政治社会変動のモデルを批判し、地域性をふまえた理論構築を志向する試みが見られ、また西欧地域を分析対象とした研究において、比較分析を通じ、地域内部の多様性が認識されていることは既述の通りだが、こうした状況に加え、従来社会科学分野で取りあげられることが比較的稀であった地域の経験を積極的に分析の対象とし、従来の理論を検証、再構成していく試みがなされている。こうした試みは、個別地域の理解と同時に、社会科学分野においてこれまで前提としてきた歴史経験の地域性を改めて浮き彫りにしている。

24) 一国内の地域間比較の研究例としては、R. プットナム (Robert D. Putnam) の研究が、行政レベル間の比較研究の例としては、G. ステインメッツ (George Steinmetz) の研究が挙げられる。Putnam 1993; Steinmetz 1993.

25) 本項で詳述するように、比較分析の方法を議論する際に、分析対象地域に応じて分析方法を選択するかどうかという点や、「非西欧地域」という分類自体にも議論の余地があるところだが、同項では便宜上、分析対象地域や問題意識の共有という点において前項とは区別した上で論じた。

従来の政治社会変動の議論の多くは、西欧地域の歴史経験を前提になされ、他地域との比較においては、その差異自体を変数として扱うことで因果律を導くという議論が多く見られた。つまり西欧地域において観察された状況を必要十分条件として扱うことで、西欧地域の歴史経験を規範化し、「非西欧地域」の分析はあくまで既存の理論を補強する目的でなされてきたという指摘とともに、このような形での理論構築のあり方に対する異論が高まっている。このように西欧地域との比較という文脈においてのみ分析されてきた地域や従来分析対象とされてこなかった地域の分析を通じて、既存の理論の再構成を促す動きがあるなか、比較分析が方法論として改めて注目されているが、同時に比較の目的や方法をめぐる議論が再燃している。

近年「非西欧地域」を分析対象とする研究において、主に比較分析は、既存の理論や概念の検証を行う目的からなされているが、各研究を精査すると、比較に対する立場やその方法、さらには分析単位、分類区分としての「地域」に対する認識は多様であることが言える。例えば既存の理論の修正をはかる立場から、西欧の歴史経験と比較する研究がある一方で、分析対象地域の独自性を強調し、他地域との比較自体を問題視する立場もある。

前者の立場をとる研究例を挙げると、J. ミグダル (Joel Migdal) は、従来の国家概念が西欧地域において制度化された国民国家という特定の歴史経験を前提にしていることを指摘し、他地域における支配体制や権力構造の分析には必ずしも適当ではないことを指摘し、独自の概念構成をはかる必要があることを指摘している²⁶⁾。こうした議論とともに K. バーキー (Karen Barkey) はオットーマン=トルコ帝国の政治体制のあり方を西欧諸国の中央集権化と比較しつつ、その独自性を論じ、R.B. ウォン (R.B. Wong) もまた中国諸王朝の興亡を西欧地域の国家と比較しながら、その特徴を指摘する試みを行っており、両者の研究はともに従来の国家支配のあり方や国家概念に関わる議論が西欧地域の歴史経験に偏向していたことを指摘し、既存の理論を修正するものとして、近年の歴史社会学分野において高い評価を受けている²⁷⁾。

一方で西欧地域との比較を行うこと自体を疑問視する見解も見られる。例えば M. マムダニ (Mahmood Mamdani) は、従来の地域研究の多くが発展論的な議論の枠組みでなされており、西欧の歴史経験を規範とする認識が根底にあることを指摘している。その意味において西欧地域をはじめ他地域との比較類推を行うこと自体、当該地域の歴史的背景を捨象し、また地政学的な視点を遮蔽する可能性があるとしている。こうした指摘とともにマムダニは、アフリカ地域における諸国家においては、独立後も国家内または国家間における部族間抗争など社会内部の紛争が続いており、またその背景として植民地経験があると

26) Migdal 1988, 2001.

27) Barkey 1994 ; Wong 1997.

して、こうした歴史経験をふまえてアフリカ地域を独自の分析単位として扱うことを提案している²⁸⁾。

上述のママダニは、西欧地域との比較を批判し、アフリカ地域の独自性を主張するとともに同地域内における国家間比較を行っているが、近年、他地域を分析対象とする研究においても、こうした地域内部または地政学的にも近接な事例の比較を行い、事例間における多様性を示すことで、従来の理論の修正をはかる研究が生まれている。例えば、J. ペイジ (J. Paige) や F. ロペ・アルベス (F. Lopez-Alves) の研究はこうした研究例として挙げられる。ペイジは中南米地域における地政学的状況やプランテーション経済への依存度を同地域の独自性として指摘しつつ、地域内の民主化の過程の多様性を議論し、またロペ・アルベスは、ラテンアメリカ地域の5カ国を事例に社会階層間の関係の変容や軍事勢力の再編のあり方が、民主化の過程の地域差の主たる要因となったことを指摘している²⁹⁾。両者の研究は、分析対象地域を絞り、地域内における国家間比較により、民主化の多様な経路を示すことで従来の単線的な議論の再構成をはかることをその主たる目的としている。つまり両者は、民主化の過程を階層間の関係から議論するという点では、ともにB. ムーア以来の議論を継承しているといえるが、同時にそれぞれ分析対象地域の独自性を指摘し、また事例選択のあり方も含め、地域固有の状況をふまえて因果的説明の再構成を行うことで、従来の比較分析の問題点を指摘しているともいえる。

上述の研究例をふまえ、比較分析のあり方に関して述べると、ママダニが指摘するように、歴史的にも地政学的にも隔たりのある地域との安易な比較や類推による弊害は注意する必要がある。加えて、ミグダルが指摘しているように、国家の社会統治能力が相対的に脆弱な傾向にある地域においては、国家は宗教、部族などと並ぶ社会の一構成単位に過ぎないような状況にあり、こうした場合において国家を比較分析単位とすることの妥当性も問われている。他方で、上述の研究に見られるような「非西欧地域」、「第3世界」という分類や、ママダニが主張している地域枠組みの固定化もまた、分析対象地域内部における多様性や固有の事情を捨象し、全体主義的な議論に陥る可能性もあり、警戒を要する。つまり分析対象として地域範囲や比較事例として分析単位のレベルを設定する際には、分析毎にその妥当性に関わる議論が必要であり、分析対象の事例内における多様性や各事例固有の事情も考慮する必要があるといえる。またこうした点をふまえ、理論構築をどのようにはかっていくかという問題も改めて議論する必要がある。

28) Mamdani 1996.

29) Paige 1997; Lopez-Alves 2000.

3. 比較分析の課題——理論再構築の方法をめぐって——

総括すると、社会科学において比較分析は、経験的地平の広がりを促すと同時に理論構築を志向する際の主要な分析方法として定着していったが、既存の理論の多くが、一部の地域の歴史経験に基づいたものであり、結果としてそうした歴史経験を規範化する傾向にあったことへの自省や批判が共有されるなか、近年その分析のあり方や目的に関して、改めてその内容を見直す議論が生まれている。加えて社会科学全般において分析方法が多様化するなか、その内容によって、理論の方向や目的が自ずと異なってくるという意味において、各研究はそれぞれ目指す理論の射程範囲を予め明示する必要があるといえる。その意味で、比較分析の方法を選択する研究者の多くは、個別地域の固有性の理解と同時に、従来の理論を再構築するという課題を自らに課すことで、社会学研究もしくは社会科学研究としての自己規定をはかっているといえる。しかしながらこうした基本的前提がある一方で、分析の目的から理論の射程範囲に関しては様々な見解が交錯している状況にある。

こうした点をふまえ、今後の比較分析の方向を述べると、上述のように分析対象の地域固有の事情をふまえた分析を行うことで、さらに従来の概念や理論を再構成することが求められているといえる。また比較分析の目的や方法自体が多様であることから、分析毎に、比較の目的や分析方法の手続きの詳細に至るまで、分析方法の妥当性を議論する必要がある。加えて分析視角の多角化が進んでおり、例えば質的調査と量的調査の併用や様々な資料を用いることで複次的な分析への試行がなされており、今後もこうした試みが進展していくと考えられる。資料の分析方法に関しては、これまで多くの比較研究を行う研究者が二次資料に依存する形で分析を行ってきたが、資料選択や個別事例に対する理解のあり方に関しては、更なる議論が必要とされる。また事例数に関しても、従来は事例数を増やすことにより理論の説明能力を高めるという傾向が見られたが、近年は事例数を絞ることで、より厳密な比較と因果関係の把握を目指す研究の利点が指摘されている³⁰⁾。つまりより地政学的に近接した地域や類似した事例を選択することで、相違点を明確化させるとともに、事例間で共有される因果律を導くことで理論構築をはかるといいう手法が、今後は同分析の主流となっていくと考えられる。上述のように、社会科学における主要な分析方法として、比較分析に関する議論は学際的に進展しているが、今後も各分野の境界を越えつつ、上述の点に関して議論を重ねていくことで、更なる発展が期される。

30) Mahoney and Rueschemeyer 2003, p. 13.

V. 歴史社会学の課題と展望

本稿では、歴史社会学における主要な研究方法としての比較分析に関する議論を検証してきたが、ここで冒頭において述べた歴史社会学分野をめぐる諸問題に立ち戻ると、歴史社会学は、従来の一般理論志向型の研究を批判し、地域性、個別性の回復を目指す研究として生まれてきた経緯があるが、その意味において比較分析は、地域性を重視しつつも、理論構築を目指し、社会科学としての実証主義を堅持する姿勢を内包するものとして位置づけられてきた。社会科学全般において、分析対象地域固有の事情を理解したうえで理論構築を行う必要性が認識されているが、そもそも歴史社会学は、こうした問題提起を原点としながら発展してきた。また近年には、こうした問題意識をさらに強め、従来の歴史社会学分野における非歴史性を指摘する議論や、より地域性を重視することで、同分野における既存理論や概念を再構成させる動きが生まれているなか、比較分析のあり方も改めて問われており、こうした議論は社会科学諸分野に浸透している。つまり理論構築における個別性の回復という歴史社会学の主張は、社会科学全体で議論されており、その意味で同分野の伝統や現在に至るまでなされてきた議論の意義は大きいといえる。

このように歴史社会学分野が示してきた歴史性や地域性の意義が、社会学ひいては社会科学諸分野において共有されているが、他方では、依然として冒頭に記したような「歴史社会学」分野に対する見解の相違があるなか、今後は同分野をどのように位置づけていくのかという課題が残されている。つまり今後、社会学の一分野として独立性を維持するのか、または従来の社会学研究に通時的な視点や地域性を吹き込むことで、社会学をさらに「歴史化」していくのか、そうした作業は社会学の一分野として行っていくのか、それともこうした制度的枠組みを超えて行っていくのか、改めて明示する必要がある。

仮に同分野の自律性を主張する場合には、分析対象を過去の一時点もしくは時点間の通時的変化を扱うということのみに、その特徴を集約させるのか、また理論構築という点で他の社会学研究に対してはどのような立場を示すのかという点に関して、その立場を明示する必要がある。また現在のように多様な分析方法や理論構築に対する立場が競合するなか、今後も様々なアプローチが共存共栄していくのか、それとも何らかの形で統合をはかっていくのかという点などについても、さらなる議論が必要とされる。

一方で、歴史社会学分野の発達自体がそうであったように、必ずしも社会学の一分野としての枠組みに拘泥することなく、これまで同分野が培ってきた視点や議論を生かしつつ、研究を行っていくという方向も考えられる。実際、多くの研究者が、既存の理論の再考を

促し、地域性をふまえた理論構築を行うという必要性を共有し、そうした視点から従来の「社会学」さらには「社会科学」における理論や学問分野の再構成を促す試みが生まれているという意味では、社会学内の一分野としての「歴史社会学」という分類自体が名目化しているともいえる。

しかしながら、上述したような方法論も含め、こうした議論をさらに発展させていくためには、何らかの制度的枠組みや理論構築のあり方に関する前提的合意が必要であるという議論もある。こうした指摘に対しては、これまで同分野が主張してきた地域性や通時的視点の意義が社会科学全般に広く共有されていることをふまえ、上述の比較分析をめぐる議論で見たような分析方法に関わる議論に特化し、社会学内の一分野という制度的枠組みを超えて、社会科学における学際的研究方法の一つとして、これまでの同分野における議論を集約しつつ発展させていくことも選択肢として考えられる。

本稿において比較分析は、歴史社会学分野の一方法としてのみならず、隣接分野との議論と密接に関連しつつ発達してきたことを示したが、このことは歴史社会学分野で議論されてきた問題群が、実際には個別性と普遍性の相克という社会科学の根幹に関わる問題であり、社会学の一分野というよりはむしろ学際的な視点で捉えていく性質のものであることを示している。社会科学全般において、従来の理論や概念に内在する歴史性を問い直す動きがあるなか、個別事例の地域性を重視し、より精緻な分析を行いつつ、理論構築を志向するという意味で、比較分析への期待は大きいといえ、今後もその方法論の発展が予想される。

上述の点をふまえ、歴史社会学分野の今後の課題を述べると、同分野の定義や問題設定のあり方を問い直す作業を行うとともに、改めて同分野の自己定義を行い、その理論や方法に関する立場を明示する必要があるといえる。また先述のように、世界諸地域の事例を扱った研究や比較分析を通じ、理論の再編を促す試みがあるなか、こうした研究が広く認知されるには言語や制度面での障壁が存在するのも事実である。今後こうした問題にどのように対応していくのかということも考えていく必要がある。その意味で、日本における歴史社会学の今後の課題とは、同分野をどのように定義するかという問題や方法に関して議論を重ねていくと同時に、国際的な議論を視野に入れつつ研究を行うことで、地域研究ないしは比較分析の一事例としてのみならず、理論面でも貢献していくことであるといえよう。

参考文献

- Abbott, Andrew. 1990. "Conceptions of Time and Events in Social Science Methods : Causal and Narrative Approaches," *Historical Methods*, 23(4).
- . 1992. "From Causes to Events : Notes on Narrative Positivism," *Sociological Methods and Research*, 20(4) : 428-455.
- . 1994. "History and Sociology : The Lost Synthesis," E.H. Monkkonen, ed. *Engaging the Past : The Uses of History across the Social Sciences*, Durham : Duke University Press, pp.77-112.
- Abrams, Philip. 1980. "History, Sociology, Historical Sociology," *Past and Present*, 87 : 3-16.
- Aminzade, Ronald. 1992. "Historical Sociology and Time," *Sociological Methods and Research*, 20(4) : 456-480.
- Barkey, Karen. 1994. *Bandits and Bureaucrats : The Ottoman Route to State Centralization*, Ithaca : Cornell University Press.
- Bates, Robert H., Avner Grief, Margaret Levi, Jean-Laurent Rosenthal, and Barry R. Weingast. 1998. *Analytic Narratives*, Princeton : Princeton University Press.
- . 2000. "The Analytic Narrative Project," *American Political Science Review*, 94 : 696-702.
- Bendix, Reinhard. 1978. *King or People : Power and the Mandate to Rule*, Berkeley : University of California Press.
- Downing, Brian. 1992. *The Military Revolution and Political Change : Origins of Democracy and Autocracy in Early Modern Europe*, Princeton : Princeton University Press.
- Ertman, Thomas. 1997. *Birth of the Leviathan : Building States and Regimes in Medieval and Early Modern Europe*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Goldthorpe, John. 1991. "The Uses of History in Sociology : Reflections on Some Recent Tendencies," *British Journal of Sociology*, 42(2) : 211-230.
- King, Gary, Robert O. Keohane, and Sidney Verba. 1994. *Designing Social Inquiry*, Princeton : Princeton University Press.
- Kiser, Edgar and Michael Hechter. 1991. "The Role of General Theory in Comparative-historical Sociology," *American Journal of Sociology*, 97(1) : 1-30.
- . 1998. "The Debate on Historical Sociology : Rational Choice Theory and Its Critics," *American Journal of Sociology*, 104(3) : 785-816.
- Lieberson, Stanley. 1991. "Small N's and Big Conclusions : An Examination of the Reasoning in Comparative Studies Based on a Small Number of Cases," *Social Forces*, 70(2) : 307-320.
- López-Alves, Fernand. 2000. *State Formation and Democracy in Latin America, 1810-1900*, Ithaca : Duke University Press.
- Mahoney, James. 2000. "Path dependence in Historical Sociology," *Theory and Society*, 29 : 507-548.
- . 2003. "Strategies of Causal Assessment in Comparative Historical Analysis." ed. James Mahoney and Dietrich Rueschemeyer, *Comparative Historical Analysis in the Social Sciences*, Cambridge : Cambridge University Press, pp.337-372.
- Mahoney, James and Dietrich Rueschemeyer. 2003. "Comparative Historical Analysis : Achievements and Agendas," J. Mahoney and D. Rueschemeyer, eds, *Comparative Historical Analysis in the Social Sciences*, Cambridge : Cambridge University Press, pp.3-38.
- Mamdani, Mahmood. 1996. *Citizen and Subject : Contemporary Africa and the Legacy of the Late Colonialism*. Princeton : Princeton University Press.
- McDonald, Terrence J. 1996. "What We Talk about When We Talk about History : The Conversations of History and Sociology," Terrence J. McDonald, ed., *The Historic Turn in the Human Sciences*, Ann Arbor : University of Michigan Press, pp.91-118.

- Migdal, Joel S. 1988. *Strong Societies and Weak States: State-Society Relations and State Capabilities in the Third World*, Princeton: Princeton University Press.
- . 2001. *State in Society: Studying How States and Societies Transform and Constitute One Another*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moore, Barrington, Jr. 1966. *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant in the Making of the Modern World*, Boston: Beacon Press.
- Paige, Jeffery. 1997. *Coffee and Power: Revolution and the Rise of Democracy in Central America*, Cambridge: Harvard University Press.
- Putnam, Robert D. with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti 1993. *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press.
- Ragin, Charles. 1990. *Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies*, Berkeley: University of California Press.
- . 1994. *Constructing Social Research*, Thousand Oaks, CA: Pine Forge Press.
- Ragin, Charles and Howard S. Becker, ed. 1992. *What is a Case?: Exploring the Foundations of Social Inquiry*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sewell, William H. Jr. 1996. "Three Temporalities: Toward an Eventful Sociology," Terrence J. McDonald, ed., *The Historic Turn in the Human Sciences*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 245-280.
- Skocpol, Theda. 1979. *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China*, Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1984. "Emerging Agendas and Recurrent Strategies in Historical Sociology," T. Skocpol, ed., *Visions and Methods in Historical Sociology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 356-391.
- . 1992. *Protecting Soldiers and Mothers: The Political Origins of Social Policy in the United States*, Cambridge: Harvard University Press, Belknap Press.
- Somers, Margaret R. 1994. "The Narrative Constitution of Identity: A Relational and Network Approach," *Theory and Society*, 23: 605-649.
- . 1996. "Where is Sociology after the Historic Turn? Knowledge, Cultures, Narrativity, and Historical Epistemologies." Terrence J. McDonald, ed. *The Historic Turn in the Human Sciences*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 53-89.
- . 1998. "'We're No Angels': Realism, Rational Choice, and Relationality in Social Science," *American Journal of Sociology*, 104(3): 722-84.
- Spruyt, Hedrik. 1994. *The Sovereign States and Its Competitors: An Analysis of Systems Change*. Princeton: Princeton University Press.
- Steinmetz, George. 1993. *Regulating the Social. The Welfare State and Local Politics in Imperial Germany*, Princeton: Princeton University Press.
- Tilly, Charles. 1975. "Western State-Making and Theories of Political Transformation," Charles Tilly, ed., *The Formation of National States in Western Europe*, Princeton: Princeton University Press, pp. 3-83.
- . 1981. *As Sociology Meets History*, New York: Academic Press.
- . 1985. *Big Structures, Large Processes, Huge Comparisons*, New York: Russell Sage Foundation.
- . 1990. *Coercion, Capital, and European States, AD. 990-1992*, Cambridge: Basil Blackwell.
- . 1995. "To Explain Political Processes," *American Journal of Sociology*, 100(6): 1594-1610.
- . 1997. *Roads from Past to Future*, Lanham, MD: Rowman & Littlefield.
- . 2001. "Historical Analysis of Political Processes," Jonathan H. Turner, ed. *Handbook of Sociological Theory*, New York: Plenum.
- Wong, R. B. 1997. *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience*, Ithaca: Cornell University Press.